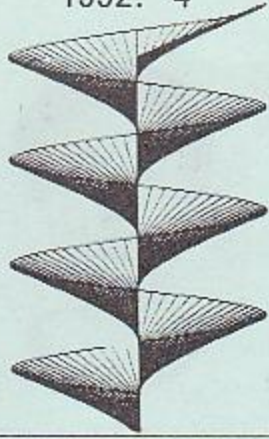


1992. 4



はるかにくす

No. 28

大阪工業大学図書館報

『君はどのような人ですか?』

毎回、年度が改まって新しい学生諸君と、講義・演習・ゼミなどで会う時に小生が声をださないうで問いかけているのは上の言葉です。幾段階かの説明を省略して、小生は勉強することは自分自身をより深く識ることでありと思っております。教員としては皆さんがどのような学生であるかについて知らなければその学習を適切に支援することはできません。つまり、皆さんの学習に関する個人情報にほしいのです。

進学早々になんと堅苦しい、各教科に関する俺の成績資料は先刻知っているではないか。と言われるのであれば、それは早計です。

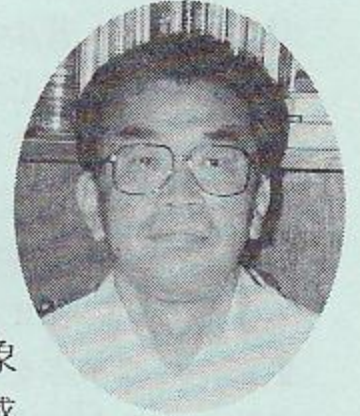
学業成績だけで皆さんの将来の能力や可能性を図ることは至難の業です。その失敗も無数にあります。では、どうして試験をするのか、と聞き直されると、これは別の問題です。

さて、当方では分からないことが多いから年度の初めは諸君に次々と愚問を呈します。「いま、どんな本を読んでいるの?」「専門書で無かったら小説や一般の雑誌ではどう?」「そう、では、どんなホビーを持っている?」最近といっても相当以前からの諸君の傾向と思われる特徴は「そんな質問は答えにくい。要するに学校に来て、気がついたらその日が済んでいます。ガリ勉ではないんですけど」これは成績表を見ればすぐ理解できます。

はずかしいことですが、皆さんに上のような問いかけをする私自身が、この歳になってまだ自分のことさえよく分かっておりません。専門

図書館長
建築学科教授・工学博士

光崎育利



分野に関連するさまざまな現象に遭って、期待したり反発を感じたり、疑問を感じたりは日常の経験ですが、その判断のもとである自身の矛盾を自覚することも多くあります。否応なく自分を掘り下げ、充足せざるを得ませんがこれには手だてが必要です。

腹藏なく話し合える友人などに自分をさらけ出すことと、適切な対象を求めての読書などによる判断領域の拡大が、どうやらこの歳になって辿りついた私のやりかたのようです。

現在では書籍の価値は読書以外の情報手段の発達により低下しているとの見方がありますが、情報が種々の方法で記録され、場合によっては機械装置により再現できることは、ありがたいこと。その整理・分類・保管などを行う図書館はこの集団の脳に相当します。この脳は外部機関ともネット・ワークを持ち結ばれておりますから、まさに利用者の頭脳によって便益が伸縮自在でありましょう。

4月から小生自身の力量を省みず図書館長をお引き受けすることになりました。就任に際して、今までの小生の読書傾向は寧ろ詮索性が強く、例えば自宅での若干の書籍をみても少数の頭脳を掘り下げる方向での限定した興味に閉ざしている偏りが多くあることにメスを加えたいと思っています。できれば工大ライブラリアンのご援助を得て、自分自身とともに工大図書館を掘り下げ考えを深めたいと考えています。皆さん何卒ご協力のほどを。

新入生の皆さんへ

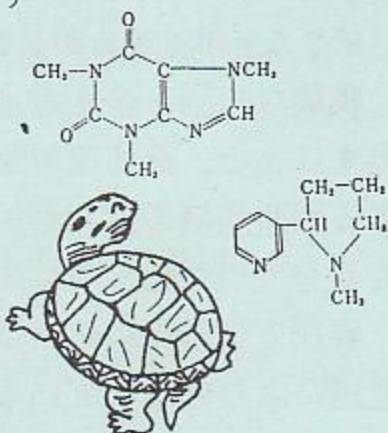
大学院工学研究科 応用化学専攻 大槻 剛



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。受験勉強から開放されてホッとされていることと思います。

さて、図書館といえばどのような印象があるでしょうか。昔のイメージでは、多くの蔵書があり、必要に応じて借りることができるのでしょうか。また、受験生（大学受験、資格試験受験も含む）にとっては、静かで空調も良く快適な空間で、集中して学習するには最適であったと思います。私も3回生まではレポートを書くために本を借り、定期試験前には図書館で勉強するというパターンでした。（試験期間中はとにかく人でいっぱい。日頃図書館を利用しない人まで来るので、この期間中は、早めに座席を確保することです）

4回生になり卒業研究に着手すると、（卒業研究は卒研といい必修であり、一番大変ですが、学生生活の中で最も充実しています）図書館がなくてはならないものになります。



卒研を進めるにあたって、与えられたテーマについて調査する必要があります。具体的には、与えられた卒研テーマについて自分なりに勉強します。

3回生までの勉強は、教科書類を1ページずつ読み進めますが、卒研の場合の勉強は、研究結果を公表してある専門分野の雑誌から、テーマについて関連のあるものを読むことから始まります。この場合、調査したい雑誌を図書館で探すわけですが、仮に本学の図書館に求める雑誌がない場合は、他大学の図書館に依頼して取りよせていただくことができます。この時になって今までの図書館に対するイメージが変化しました。本来なら自分で手をつくして調べるところ、図書館がその肩代りをして必要な文献を取りよせてくれるわけです。こうなると、卒研推進において図書館の重要性がますます大きくなります。

このように図書館は、私達にとってなくてはならないものであり、情報化時代といわれる現代、有効に利用することです。また、わからないことがあれば、図書館メインカウンターに申し出れば気軽に応じてくれます。

客ではないのだが、なかなかそれに気付いてくれない。だいたい2月の初めにその気配が感じられ、4月になるとピークになる。

春の長雨が桜の花を散らせ、梅雨が終わる頃、一応の落ち着きを見せるものの、居心地の良い所にはずっと居候している。

海に降る雪のように、決してその終わりはない。春の行楽に出かけることなどとても勇気のいることだが、楽しいことのやめられない悲しき習性の持ち主。花粉症グッズを片手に街を練り歩く。今年も何とか乗り切れそうだ。

おやおや疲れが背中に出ていますよ。

お互い大事のないように、ほどほどに。

（請求記号 493.14 K 第1図書室）



『花粉症これさえ読めば恐くない』

北爪 千恵子 著
（日本文芸社）

プロ野球各チームのキャンプが一齐に始まり、春のきざしが全国各地で聞こえ始め、桜前線が南から北へゆっくりと獲物を狙うように近寄ってくる頃、1年で最もつらい時期がやってくるのです。

目のかゆみと鼻のつまりで、春の訪れを微妙に感知する。もうおわかりですね。

今年もまた、花粉症が到来しました。

この症状と付き合い始めて、かれこれ10年近く、随分と慣れ親しんできたものの、毎年違う何かを味わわせてくれる。実を言うと招きたい

シリーズ 淀川ぶらり散策

第19話

「大阪弁 その3 大阪と文化 1」

浅井三千治

淀の川面に、桜の花びら流れ、花びら流れ、
陽はうららに、若き人の声、愉しくこだます

新入生諸君ご入学おめでとう。

70年の歴史を刻むわが学園。今夏には、メモリアルゲートが正門を美しく飾り、また16階建の校舎が完成し、淀の川面にその雄姿を現わす。新たな日が、このように、希望に満ち満ちたものであってほしいものだ。

南海電鉄に届いた「田舎臭くて、新空港ができるというのに、どうかと思う」という一通の投書が、それまでの「お待ちどおさんでした」で始まる大阪弁の車内放送を標準語に改めさせる契機となったという。

これには、沢山の非難の手紙が、全国より寄せられたそうだが、実際には昔ながらの大阪弁を話せる職員が減ったというのが真相のようだ。

大阪に本社を置く、ある機械工具商社では、「全国展開する以上、大阪弁の使用を控えること」の達を出し、標準語のマナー集を社員に配付したという。特に気をつけるべき言葉として、「ちゃう」「やねん」「ほんで」が挙がっているそうであるが、いくらなんでも仕事の上では、普通これらの言葉は使われていないであろう。

要は、今の大阪弁を公の場で使うには、語感の洗練さが足りない、ということなのであろう。ある人は、「テレビの街頭録画をみれば……東京では、ほとんどの場合、敬語が使われている。ところが、大阪ではちゃんとした敬語を使う人は希だ。」と指摘する。そして、「こういう現状では、大阪に文化の灯を、などと空々しくていえたものではない」とまで言いきる。

梅棹忠夫氏は、「大阪は下司のまちだ」という。また、「大阪の一番の欠点は、大阪の市民に文化に対する需要がない」ともいう。以前に大阪市が作った「大阪の文化を考える会」でも、「大阪に文化は要るか？」なんてことが話され

ている。

これだけ言われても大阪の人は、あまり気にする風ではない。どうしてだろうか。少し、検証してみよう。

昔から大阪は町人の町であった。江戸や、熊本、金沢の町では全体の7割から8割近くが、侍屋敷であったが、大阪では75パーセントが町人町で、諸国大名の蔵屋敷を加えても侍屋敷は、25パーセント程度であったという。そして、外観だけでなく、町人達の実力も、なかなかのものであった。

天下人となった秀吉は、大阪城を築城すると同時に大阪の町づくりを企図した。交通と城の防備のために豪商達に命じて運河を掘らせた。こうして掘られた大川、長堀川、東横堀、西横堀に囲まれた地域が、「船場」だ。この川にかかる橋は商人たちの寄付で造られたが、その費用負担がたたり、橋が完成する都度、船場の豪商の店は次々と倒産していったという。

俗に「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」といわれるが、この「橋の杭を打って倒れる」が転じて、今の「食い倒れ」となったということらしい。

このように大阪では、町は自分達で築いてきた、自分達で造り上げていくという、自負と意気込みが強い。明治以降の町づくりでも、東京と違い、官に頼らず自分達の力で町づくりが進められた。

その一つに関西の私鉄の果たしてきた役割が挙げられる。

明治以降の産業の勃興により都市の人口は、急激に増加したが、郊外の住宅地の開発と交通手段としての鉄道網の整備を行い、住いと輸送力の確保を、関西では私鉄が担ってきた。

今でこそ、プロ野球の在阪球団は、阪神、近鉄だけとなってしまったが、最近まではこれに阪急、南海を加えた4球団が12球団の中で覇を競っていた。

大阪の地盤沈下が叫ばれて久しいが、かつては、これだけのエネルギーと活力が、大阪の町にはあった。これが、大阪文化の源でもあった。

今年も阪神は弱そうだが、元気をだせよ！！

(以下次号)

第19話 「大阪弁 その3 大阪と文化」

